

東勇作メモリアル (1) —『海の嘆き』のヴェールと指輪—

展示期間 /
2015年10月20日(火)~2015年11月23日(月・祝)
企画・構成 /
関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

東勇作メモリアル

「薄井憲二バレエ・コレクション」の中から、薄井氏の師にあたる東勇作(1910~1971)のシリーズを、お届けします。第一回は、東の自作ソロの代表作『海の嘆き』で着用されたヴェールと指輪を中心に構成。

2014年10月19日、『牧神の午後』を踊る東勇作の銅像(村田勝四郎作)が、仙台市青葉区の西公園に設置されました。これは、「私たちの師匠だった東は長い間存在を忘れられていたが、故郷の仙台に銅像を移すことで、功績を後世に伝えたい」との思いから、薄井氏が、当初設置されていた福岡市のRKB毎日放送敷地内から譲り受け、寄贈したものです。今後、当コレクション所蔵の『牧神の午後』像や、東自身の手による陶器作品など、展示して参ります。

これらの貴重な資料を通して、日本バレエの黎明期を支えた東勇作氏、そして、薄井憲二氏のバレエに対する想いや煌めきを、ご堪能ください。

出展リスト

- ◆東勇作が『海の嘆き』で着用したヴェール(日本1967年)
- ◆東勇作が『海の嘆き』で着用した指輪(日本1967年)
- ◆東勇作・益田隆『牝猫』写真 署名入り(日本1934年)
- ◆東勇作・内田道生・鈴木滝夫・薄井憲二 集合写真(日本1940年代)
- ◆参考写真『海の嘆き』『今宵はヨハン・シュトラウスを』(薄井憲二著『生誕100周年記念誌 牧神~或いは東勇作~』東勇作同門会・東博子 2010年より)
- ◆参考映像『東勇作と牧神の午後』(仙台・ことりTV 2015年9月)

東勇作とは —薄井憲二

東勇作は、バレエ舞踊家を目指して仙台から上京した。バレエ芸術の殆ど存在しない当時の日本にあって、伝手を求めて習練に励み、英仏語による資料に学び、自らのバレエを確立し1941年バレエ団を設立した。西欧の作品を自分流の解釈で上演し成功したが、東の真骨頂は、習得したバレエの土台に、自らの舞踊性をのせた、自分のための独舞であった。その芸術性、独創性、高度な技術は、東自身以外誰れにも伝え得ず、残念ながら消滅した。

東勇作『海の嘆き』とは —薄井憲二

『海の嘆き』(ショパン作曲『ノクターン 10番』)。衣装は白のギリシャ風チュニック、頭も胸も腕も沢山の真珠で華やかに飾った。薄倅の王子ということで、舞台上に正座してうなだれるところもある。しかし踊りは、舞台いっぱい長さの薄物のヴェールを操るといふ大胆なものだった。上手奥から登場では両手で揚げながら下手前まで歩いていく。歩き終わってもヴェールの裾はまだ袖の中にあつて、舞台には見事な斜めのラインが出来る。この長いヴェールは、やや斜めに舞台を進む早いシエネ(回転技)では、身体の廻りに幾重にも輪をつくる。廻りながら宙に投げ、降りてくれば身体に巻きつくところを、巧みな手捌きでぐり抜ける。

東は、この布の扱いを日本舞踊から学んだ。日本舞踊の巧みな小道具の使い方をいつも尊敬していた。

しばらくあとでニューヨーク・シティ・バレエが来日し、バランシン作『放蕩息子』が初めて日本の舞台に登場する。標題の息子をたぶらかす、魔性の女性が登場するが、彼女はヴェルヴェットの長いヴェールを曳いている。身体に巻きつけたり、足の間を通したりといろいろ使い方に凝っているが、東は「ヴェールの使い方がうまくない」といつていた。

(薄井憲二著『生誕100周年 記念誌 牧神~或いは東勇作~』東勇作同門会・東博子 2010年 38~39頁)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22
tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用